

(4面からのつづき)

「我々の工場には、衛生面の高さに加え、日本の顧客からの様々なニーズ・スペックに対応できるフレキシビリティが最大の特徴だ。そのため、生産の様々な段階で入念なクオリティチェックを行っている」とモナルカ工場長のホセ・アルフレッド・デレナ・ガルシア氏は強調する。

工場長によると、メキシコ国内や日本や米国、韓国向け輸出が好調に推移するほか、今年6月にはロシア向け生産も始まり、今後はベトナムやエジプト向け輸出も始まる見通しだという。そうした国内外の需要拡大に 대응するため、フィードロットの頭数を増加させており、モナルカ工場に隣接するフィードロットは、現在の9万2千頭から年内に10万3千頭に拡大する見込みだという。同時に工場の生産能力も強化しており、ボーニングエリアを1ライン拡張、パッキングエリアも30%ほど拡大させる方向だ。稼働時間も現在の1シフト8時間を12時間に生産能力を上げるなどして国内外の需要増加に対応する考えだという。モナルカ工場に隣接するフィードロットに足を運ぶと、昨年9月に訪れた当時よりも敷地は980haに広がっており(去年は900ha)、飼料工場のサイロも増築されていた。

スカルネでは全国78カ所の集荷センターを通じて契約農家から12カ月～18カ月齢の子牛を購入している。各ペンに約60頭ずつ、性別、体重(15kgごと)、体質ごとに細かく分けて導入する。各子牛には識別タグが付けられ、最終

製品まで厳格に管理され、農家段階のロットまでトレースが可能となっている。また農家に対しては誕生日や給餌・投薬履歴の情報記録の管理・提出を求めている。

モナルカ工場のフィードロットは特にハリスコ州やミチョアカン州、アグアスカリエンテス州など主にメキシコ南部の州から買い付けしており、品種は耐暑性のあるブラーマン種中心にヨーロッパ種やそれらのクロス種で、約160～220日かけてコーンやヘイ、糖蜜、大豆ミールなどを与える。なお、スカルネでは15～24カ月齢でと畜しており、と畜時の生体重量は1,080ポンド(490kg)まで肥育させている。

メキシコ国内の多くの契約農家から肥育素牛を買い付けているスカルネだが、製品の均一化や生産コストの低減を図るために契約農家に対しては全て牧草を統一化させるほか、飼料の配合率を工夫するなどして飼料要求量の改善を図っているという。さらに、対日輸出向けには18カ月齢未満の若齢雌牛に限定した製品づくりを計画しているなど、品種レベルでのカスタマイズ対応も進める方向だ。グループ全体のフィードロットの肥育頭数は現在の30万頭から来年には40万頭にまで拡大する方針で、日本向け供給量はさらに増加する見込みだ。確かな品質と熟練した作業員による細かなスペック対応、バラエティーに富んだ付加価値商品により拡大してきたスカルネだが、日本市場に対するたゆまぬ努力は続く。

(つづく)

○ TOKYOX 植村会長が HATTORI 食育クラブで対談、AW の取組みと食育の関係を語る

TOKYOX の流通・販売事業者らで組織する「TOKYOX-Association」の植村光一郎会長は15日、都内で同会も加盟する「HATTORI 食育クラブ」の服部幸應会長と食育をテーマに対談した。会場には同クラブの食品企業や外食関係者60人が参加するなか、植村会長は、TOKYOX が生まれた経緯や生産・流通組織の取組みなどを紹介、TOKYOX が実践するアニマルウェルフェア(AW)の取組みやフードチェーンと「食育」の関係について自らの考えを述べた。

植村会長は、「Safety」「Biotics」「Animal welfare」「Quality」の4つの理念「東京SaBAQ」に基づいて生産されるTOKYOXの取組みは、食育の柱である「膳＝食物への感謝の気持ち」「選食＝健康で美味しい豚肉を食べる」「環境への

配慮＝循環型農業」と深い結びつきがあると指摘。「AWと消費者への結びつきは難しいが、食育に結び付けると消費者にも理解が深まるようになる」とし、こうしたTOKYOXのこだわりが学校給食の栄養士にも理解され、中央区や江東区の学校給食への利用に結び付いたことを紹介した。また、TOKYOXは農家の組合と流通事業者の組合がお互いに連携しながらブランドを構築していることを踏まえ、「グローバル化のなかで、開発者、生産者、流通業者、販売者、消費者が主体性を持ち尊重し合いながら食料を作ってゆく『アグリフードチェーン』が重要になる。TOKYOXで作ったシステムが各地で広がるようになると、日本の畜産はさらに良い方向に向かってゆくのではないかと強調した。